告白
全作品と講評
www.columnland.net

告白は時に甘く、時にほろ苦い。
口にするまで味の分からないチョコレートだ。
君の告白の味は何だろう。

2人目

恥ずかしくて言えない？

何を言ったらいいのかわからない？

告白代行します

当社は、日頃言えそうで言えない感謝の告白、ちょっとした過去の過ちに対する懺悔の告白、そして気になるあの子への愛の告白を、恥ずかしがり屋の方、不器用な方、はたまた自身のない方にかわり代行するというサービスを提供しております。どのような告白の場面におかれましても、イケメン美人口達者はもちろん、暑苦しいくらいの熱血系や、ちょっとかわいらしさを覚えるオドオド系など多数の人材を擁しており、お客様の好みの告白を演出することができます。

また、文面指導におきましても、その文面の長短にかかわらず熟練の専門スタッフがお客様の気持ちを汲み取ったうえで、最適な文面を推敲するお手伝いを致します。このサービスにおきましては「僕の心情をもっともよく表す言葉はこれだったんだよ！」等とお褒めの言葉を多数頂いております。

気になる料金ですが、基本的に

・文面指導料金　30分525円～

・告白代理人人件費（代理人により大きく異なります）

で構成されております。あなた様のご利用をお待ちしております。

常にクリエイティブなサービスを提供する　有限会社コンフェス

TEL 0120-115-989（いいこく白）

※ご注意　告白後のことに関して、「生活のためにやむなく詐欺師やってた知り合いがおたくのとこで懺悔代行したら出頭とみなされ牢屋にぶち込められた」とか「愛の告白代行したらおたくの美人スタッフと彼が付き合っちゃった、あたしのたっくん返してよ」などという苦情が寄せられることがございましたが、当社では告白代行の結果について一切の責任を負い兼ねませんのでご了承ください。

高校三年の三月。僕らは卒業を迎えた。
受験の結果は無事サクラサクだったが、ここでは桜の咲く季節には少し早い。
卒業式も終わり、誰もいなくなった中庭で二人ベンチに腰掛ける。
幼稚園からずっと一緒だった彼女とも、大学からは別々になる。
言うべきことは山ほどあった。
大学行っても元気でな、とか。今まで楽しかった、とか。
だけど、一番言いたいのはそんなことじゃない。
わかってたのに、なかなか口にできなかった。
普段はお喋りな彼女も口数少なく、僕の当たり障りのない言葉に相槌をうつだけだった。
とうとう話題も尽き、沈黙が二人を包む。
空はどんよりとした雲に覆われ、冷たい空気が体温を奪っていく。
言い出せないまま終わるのかと諦めかけたとき、視界に白いものがちらついて見えた。
「雪だ」
二人の声が重なる。
二人で顔を見合わせて、笑い合う。
いつもあったそんな光景が、どうしようもなく愛しくて、切なかった。
遅れて降ったその雪は、積もることなく溶けていく。
こんな風に、僕の想いも消えていってしまうのか。
そんなのは嫌だ。
季節はずれの雪に後押しされて、僕はやっと想いを口にする。

亜麻色の髪のその人

満員の目黒線を下りる、重くて生暖かい空気から解放された僕は息を吸い込みながらウォークマンを取り出し耳に着けながら歩く。　エスカレーターを上りきり改札に向けてパスモを出そうとしている時、見覚えのある後姿が目に入る。まだ秋なのに真冬の様なセーター、可愛いと思っているのだろうか？特徴のあるひらひらとした歩き方。まるで小学生だ。そして似合わない亜麻色の髪。染めるならもっと他の色があったと思う。後姿ですぐに誰だか解る。

改札を出てウォークマンを外しながら速足で追いつく。念の為追い越しながら顔を見て姉だと確認してから肩を指で二回叩く。姉貴は「ああ。」と一言。僕も「おお。」と一言。並んで無言で歩く。５０メートル位無言で歩く。もしこれが友達や後輩、或いは先輩であったらある種の気まずさを感じるかもしれないが、全くそんな事が無いあたり兄弟なのだろう。

駅から2件目になるコンビニを通り過ぎた辺りで姉貴の携帯がブッブッと鳴る。姉はちらと見て、携帯を閉じ、またポケットにしまう。すると徐に裏拳で僕の胸を軽く打ち「なんでやねん」と言う。僕は特に驚かない、この人は暇なとき「なんでやねん」をかます事があるのだ。痛くないから別に文句は言わない。イライラしている時はキレる事もある。無視する事もある。「なんでやねん」とやり返す事もある。その場合何回か「なんでやねん」を応酬し合う事になったり、無視されたりする。稀に会話が発生する事もある。今回がそうだった。

「なんでやねん」の時に当たった手から胸に伝わる圧力に偏りがあったので見てみると姉貴の薬指には指輪が光っている。

「指輪。」指輪を指さしそう言うと、

「ああ、そういえば言ってなかった。今度、幹夫と結婚するんだ。」そう答える姉貴。幹夫と姉貴は四年も付き合っていたし、幹夫はもう社会人だったから考えてみれば不思議な事じゃなかった。

でも、やっぱり驚いた僕は何事も無かったかの様に歩き続ける姉貴の背中を見つめて立ち尽くしていた。それに気づき戻ってきた彼女は背伸びをして僕の頭に手を乗せた、ぽんと。

小学４年生の頃、姉貴の背にやっと追いつきかけてきたあの頃、二人で留守番をしたことがあった。父親は出張に行っていて母親は友人の結婚式に行っていた。二人とも帰りが遅いので、夜ご飯はカップ麺を食べる事になっていた。カップ麺はいつも台所の棚の一番上に置かれていて、届かないから僕や姉は椅子を持ってこなければならなかった。今回も例に漏れず姉が居間に椅子を取りに行った。その時、僕はある事を閃いた。

それを試した結果、僕は肘を床に打ち付けて少し泣いた。けど両手にはカップ麺が一つずつ握られていた。僕の大ジャンプを音で察知した姉貴が椅子をほっぽりだして駆けつける。それから、（肘をぶつけ半泣きであるが）誇らしげにカップ麺を掲げる僕の頭に手をぽんと乗せ、「やるじゃん。」と笑った。僕は何故かとても恥ずかしくて、でも凄く嬉しくて、その日は一日中上機嫌だった。ぽんと手を乗せられたのが嬉しかったのか、少し大人びた姉の笑顔が好きだったのか、他に原因があるのか今でも解らない。

とにかくその時の甘酸っぱい様な戸惑う様な感覚を僕は思い出した。

「俺、姉貴の事、好きだったかも。」そう言った僕は半泣きだったかもしれない。

姉貴はというと何故か爆笑している。何かまずい事を言った気がして、

「わ、俺何言ってんだろ。わー。これヤバくないか？」と大げさに茶化して笑う。この人が幸せになりますように、そう願うと薬指の輪っかがキラリと光って、何事も無かったかの様に僕達は歩き出す。

告白指南書

直接告白

一見この方法が一番いいと思われがちであるが、やはり告白とは緊張するもの。結果、うまく想いを伝えられず失敗に終わる可能性が高い。

電話で告白

相手が見えないというのもまた、逆に緊張を生みだす原因となる。特に、緊張により滑舌が悪くなることには注意が必要。たいてい「え？」と聞き返され、もう何も言えなくなり失敗に終わる。

メールで告白

いうまでもないが、直接告白ができない勇気のなさに失望され、失敗に終わる。

手紙で告白

今の時代に手紙で告白とか気持ち悪がられすぎて、一瞬で失敗に終わる。

以心伝心

言葉で伝えなくても想いは伝わるという考えは日本人の悪い癖である。国際化の進んだ今の日本ではもはや通用しない。相手には何にも想いは伝わらず、この恋は自然消滅。

アリバイを告げる

これは大学の同期と訪れた山奥の洋館で盗難事件が発生した、という設定の劇を来月の定期公演でやることになり、その練習中にやっていたアドリブ部の一節である。

「もう一度各々で荷物のチェックをしてみては如何でしょうか？」
「さっきから何度もしてるわよ！それでも出てこないって事は誰かが盗ったに決まってるわ！私のフォロンちゃんを盗った人は早く名乗り出なさいな！」
久米田の提案にゆうは半ばキレながらそう応え、周りを見渡した。
「ねえゆう、さっきからフォロンちゃんフォロンちゃんって言ってるけど一体それはなんなのさ。具体的に説明してくれないと私たちだって探しようがないよ」
「麻里奈の言う通りです。ゆうさん、貴女の物に名前を付けたがる癖は知ってるがこういう時くらいはその癖をどうにかしてくれませんか？」
麻里奈の意見に同意する旨の発言をしながらも浩史はソファーに腰掛けて小説を読んでいる。その様子を見てゆうは頭にきたようだ。
「浩史！あんた本ばっかり読んでないで手伝いなさいよ！あ、分ったわ！アンタが私のフォロンちゃんを盗んだんでしょう！さあ、早く返しなさい！」
浩史は溜息を吐き、まるで話が通じないとでも言う様に頭を横に振る。
「浩史さんは盗んでなんていません、この人は白ですよ」
「……アサミさん、居たんですか？」
「ええ、ずっと」
浩史が発言をしようとするタイミングにぴったりと被せてソファーの裏からアサミがひょっこりと出てきた。
「なんでアサミがそんなことわかるのよ！」
「それはずっと見ていたからですよ。なんならこの洋館に入ってからの浩史さんの行動を分単位でお教えしましょうか？それとも望さんのここ一週間の行動でも構いませんが。」
望とは浩史役をやっている彼の本名である。浩史は顔を引きつらせながら問う。
「な、なんでそんな事を知っているのですか？」
「言ったじゃないですか。見てたんですよ、ずっと」
「ど、どうして？」
「どうしてって好きだからに決まってるじゃないですか。六時半に目覚ましをかけたのに二度寝して結局七時半に起きて今日の練習にギリギリの時間になった事も来る途中に乗っていた電車の中で向かいに座ったＯＬさんをいやらしい目で二駅分の八分間もみていた事も駅を降りてから猫に目を奪われて十三分もしゃがみこんでいた事もそのせいで練習に遅れた事も全部見てました。でも、望さんはゆうさんの荷物になんて近づいてませんよ」
アサミが淡々と話すなか稽古場は凍りついていた。
「これってもしかして最近流行のすとーk」「純愛ですよ、いやだなぁ」
皆が凍りつく中、麻里奈がポケットからハンカチを取り出す。
「あ、もしかしてフォロンちゃんってさっき借りたこのハンカチの事かな？ご、ごめんねーすっかり忘れてたよー。浩史君は白だったのにごめんね！」
棒読みではあったが、この行為により空気が動き出した。真っ白になった望をおいてけぼりにして。

初めまして。私はある配達員の者です。

今回あなたにお手紙をお書きするのはあなたに伝えておきたい事があるからです。それは、勝手ながら私はずっと前からあなたに惚れているという事です。

あなたは私の事など知りもしないでしょう。私は何度もやってくる様々な配達員のうちの一人でしかないのですから。けれども私も仕事で様々な宛先に配達をしますが、初めてあなたの家に配達をした時の事を忘れてはいません。私はあなたに一目惚れをしたのです。しかし私は臆病でした。こうして名前すら明かさずに自分の思いをただ不器用に綴ることしか出来ないのですから。

実は私があなたに手紙を書くのはこれが初めてではありません。この手紙はあなたに書く百枚目の手紙になります。そして以前の九十九枚の手紙は今でも私の机の引き出しの中に眠ったままなのです。そしてこの百枚目の手紙もあなたに送るつもりはありません。これは決して勇気が無いからではありません。あなたにこれを送る事はあなたがた夫婦にとって迷惑な行為になってしまうという事を最近やっと気づけたからです。私が送る事の無い手紙を書くのはこれが最後になるでしょう。

私は今後とも配達員を続けます。あなたの記憶には残らないような、たくさんいる配達員のうちの一人として。

ある配達員より

fは時間の経過、f（幼なじみ）=何？

「ごめん、待った？」

吐いた瞬間白く凍りつく息を見ているといつもと同じ元気な声が聞こえた。

「いや、全然」

軽く答えて足下に下ろしておいた鞄を持ち上げた。二人での下校ももはや10年以上続いている。僕の右側であるいている、僕の幼なじみ、鷲巣望との下校道。

「あ、見て治君、三毛猫がいるよ！」

変わることのない景色の中で望はいつも何かの新しさを見つける、そして僕はそんな望を見つめる。望を見ているだけで、なんかとても暖かい気持ちになる。そして、胸の中のどこかが、痒くなる。これは、ただの気のせいではない。

「じゃ、また明日ね！」

気づくと、いつのまにか家についていた。望と僕はすぐ隣にすんでいる。部屋で大声を出すと聞こえたりもする。どうせ夕方に宿題見せてとかいいにくるくせにまた明日とか。顔には出さずに、僕も手を振った。

「おう、じゃな」

望がちゃんと鍵をかけることを確かめてから、僕は鍵を出した。

僕には母がいない。僕が2歳のときに亡くなったそうだ。そのときから仕事で忙しい父に代わって父の友人である望の母が僕の面倒を見てくれた。幼い頃は殆ど毎日望の家ですごした。僕にとっては鷲巣家はもう1つの家のようなところだ。望も僕のことを、いろいろと気を遣ってくれて、母親のいない寂しさを知らずに育つことができた。勿論望のお父さんにもいろいろ世話になった。そう、お隣さんじゃない、家族なんだ。

鷲巣家のことを考えていると思考はいつもある1つの点に収束する、望だ。僕にとって望は大切な家族、そして大事な幼なじみだ。でも最近、それが少し変わったような気がする。もしかしたらずっと前から、変わっていたかもしれない。ただ、それに自覚を持ったのが最近のことであるだけだ。望はどうなんだろうと、悩んでしまう。悩みに悩んで、結論は出ないまま思考の流れを無理矢理とめるしかない。そんな風に一人で頭を抱えているといきなり携帯が鳴った。確認してみると望からのメールだった。望のことを考えていたから少しびっくりしたけど、そろそろ宿題を聞きにくる時間だしただの偶然のようだ。でもなぜ今日はわざわざメールなんだろう？いつもなら勝手に入ってくるくせに。一応携帯を開けて内容を確認する。

「大事な話があります。10分後に伺います」

いきなりすぎる。大事な話って何？分からない。けど、いつもの望と違う真剣さが感じられるメールだった。僕は心の準備をしながら望が来るのを待った。

10分後、玄関のベルが鳴った。お互いの家の鍵は持ってるから勝手に開ければいいのに。それだけ真剣な話なんだろう。なぜか、緊張してくる。心拍数があがることを自覚しながら望を迎え、お茶を入れてくる。小さいこたつを間にして対面し、沈黙する。望は俯いたまま、何も言わない。僕はただ待つ、望の言葉を。

お茶が冷め湯気がしなくなってからようやく、望は口を開いた。

「南郷治君、あなたに聞きます、私は、あなたのなんですか？」

変な質問だ。今更何を聞いてるんだ。

「大切な幼なじみ、だよ。今までも、そして今からも」

違う。僕は気付いた。望が何を言おうとしているか。

「そんなの、いや」

望が顔を上げた。まっすぐに僕の目を見てくる。きっとこれを言う為にずっと悩んできたんだろう。そして今日ようやく結論にたどり着いたんだ。

「ただの幼なじみのままじゃ、いやなの。あたしは、治君の、あなたの…」

彼女の、願いは

「あなたのお母さんになりたいの！」

僕と同じ… え？

「お父さんをあたしにくださいッ！」

そう叫びながら土下座する彼女を前にして、僕は固まってしまった。

良いモテ期が来てもいい？

「素でキス出来んほど本気で好きです。」

「世の中ね　顔かお金かなのよ」

A「それで、大事な話って何？」
B「いきなりでごめん。実は僕・・・好きな人ができたんだ。」
A「えっ・・・」
B「本当にごめん。まだ付き合って半年だというのに・・・」
A「そっか・・・まあ仕方ないね。」
B「あれ・・・あんまり驚いてない？」
A「うん。私と話している時、たまにボーっとしてたもん。あまり私といても楽しくないのかなって。」
B「いやいや！そういうことじゃないんだよ。君といたら楽しいし、会話も弾む。君の事は好きなんだ。でも、それ以上に好きな人ができちゃったんだよ。」
A「そっか・・・分かった。」

そうだ。これは当たり前のことなんだ。この人は、前の彼氏とは対称的に、成績優秀でスポーツ万能、さらには容姿端麗で性格も優しい。完璧な人。私なんかとは釣り合いがとれるわけがない。私みたいなダメな人の面倒を見るのが好きそうだから、今までやってこれたようなもので、いつこうなってもおかしくなかったんだ。
でも・・・それでも、こんな素晴らしい人に好きになってもらえた。それだけで、私は満足だ。

A「それで・・・その好きな人ってのは誰なの？」
B「あ、君の前の恋人だよ。」

『予想外の告白』

ショートコント　〜告白〜

女「好きです！　突き合ってください！」
男「字が違うわ！　いったい何を突き合うっていうんだ！」

女「好きです！　吐き合ってください！」
男「また字が違う！　なんか汚くて嫌だわ！」

女「好きです！　嫁ぎ合ってください！」
男「嫁ぎ合うってなんだ！　俺は男だしどっちの家に住むんだ！」

女「月です！　好き合ってください！」
男「ついに人じゃなくなった！　なんか……ロマンチックだな」

女「寿司です！　醤油付け合ってください！」
男「醤油を付け合うってなんだ！　ちなみに俺は寿司がそこそこ好きだ！」

女「杉です！　マスクしてください！」
男「毎年毎年花粉飛ばすな！　もういいからそろそろ人に戻れ！」

女「お〇ぎです！　付き合ってくれたっていいじゃないのぉ」
男「やめろ！　人とはいえ、おす〇に告白されたくないわ！」

女「実は君のメガネを踏んで割ったの……私なんだ」
男「その告白じゃねぇ！　っていうかお前だったのか！　弁償しろ！」

女「あの容疑者には動機がない。おそらく……シロだろう。」
男「白だと告げるのは別に告白じゃねぇよ！」

女「べっ、別にアンタのことなんか好きじゃないんだからね！」
男「それは告白とは認めん！　ところでこのセリフってツンデレの常套句のように使われてるけど、ツンデレじゃないよね。デレがないよね。」

女「好きだ！」
男「お、おおお……」

届かない告白

伝えたい思い

手紙に書いて

手渡す勇気はなくて

しょうがないから小さな瓶に手紙を詰めて

大きな海に流した

巡り巡ってあなたに届きますように

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	無題（チョコレート）	1 pt	9 位	1 sp
		ビター＆スイート。 チョコレートに喩えた着眼が、たしかに食べてみないと分からないよね、と納得の展開です。 どっちかな？ ドキドキ感がストレートに伝わってくる、とてもういういしい今週の表紙、歌まで付いた特別賞をいただけました。 特別賞：ちょっこれーと、ちょっこれーと、ちょこれーとーはめーいじ賞 from D班（バレンタインらしかったから） イチオシフレーズ：「君の告白の味は何だろう。」×２		
02	告白代行します	5 pt	6 位	1 sp
		２番正統派枠のはずが……ん？ 広告というアイディアが目を引く上に、つかみも上々。ああ、そんな商売あったら頼みたいなと思わせる魅力で引き込みます。 後半のネタにもう少し起爆力ほしいか。でも、たっくんがクリーンヒットしてイチオシフレーズ大賞です、おめでとう！ 特別賞：もっと日本語を勉強しま賞 from A班（漢字間違いや日本語のミスが目立ったので） イチオシフレーズ：「責任を負いかねません。」 →「一切の責任を負いかねます」＝負いません、ということです、お間違いなく。「あたしのたっくん返してよ！」×２「115-989」		
03	はじまりを告げる白	10 pt	3 位	0 sp
		春へといざなう、ゆったりとした序奏のような。 雪のように溶けてしまわずに形にしたい。ラストにしんみり、情感ゆたかな描写でした。 笑いやネタうずまくなか、この佳品を３位まで押し上げるなんて、みなさまなかなかにお目が高い。 おめでとうブロンズ・メダル！		
04	亜麻色の髪のその人	0 pt	10 位	0 sp
		なんでやねん、で心が通じちゃうなんて、ほほえましい姉弟です。 陽だまりのほっこり感、ここまで巧みに描写できるのは、たぶん、きっと（気持ち面では）実話!?		
05	告白指南書	2 pt	8 位	5 sp
		指南書のくせに失敗まっしぐらの例ばっかりなんてっっと笑わせてくれます。 で、結局、直接告白がいちばん確率はマシだよ、ってことなのか、そうなのか。いやいや、まだツイッターやミクシィがあるさ、と。 読者参加を誘う話題の持って行き方がじょうずで、最多特別賞です。おめでとう!! 特別賞：じゃあどうすればいいので賞 from B班 でも		

		まだツイッターがある賞 from F班（全部失敗ではかわいそうだから） どうやって告白すればいいんで賞 from G班（どうすればいいの） 東工大生にはムリで賞 from I班（東工大生が告白できるわけないから） 二人目に頼みま賞 from E班（5 7 12同時受賞）
06	アリバイを告げる	0 pt / 10 位 / 1 sp 一難去ってまた一難。 アリバイが証明されたところで、ストーカーの存在を突きつけられる。たいへんですねヒロシさん。おだいじに。 着眼のユニークさと文章の勢いが光りました。 特別賞：アドリブで劇が終わったで賞 from H班（アドリブにもかかわらず事件が終始してしまっていたから） イチオシフレーズ：「すとーｋ」「純愛ですよ、いやだなぁ」
07	ある配達員より	6 pt / 5 位 / 1 sp 配達員さんによる、100通の出さない手紙。なかなかにロマンティックな設定ですね～。100通多すぎかなと作者さんおっしゃってましたけど、物語はそれくらい大げさで良いのでは。 告げずにあきらめ身を引く恋の切なさが伝わります。 特別賞：勤労感謝賞 from C班 二人目に頼みま賞 from E班（5 7 12同時受賞）
08	ｆは時間の経過、ｆ（幼なじみ）=何？	11 pt / 2 位 / 1 sp 出ました韓流こってり味の家族ドラマ。 そうかターゲットはお父さんだったのかぁ。それまでまったく存在感がないだけに、ラストのインパクトが巨大です。 たくみな描写力にも支えられ、「文少力」は発揮できなかったにもかかわらず、堂々のシルバー･メダルです、おめでとう!! 特別賞：お、おおお……賞 from J班（おちこれかよ） イチオシフレーズ：「お父さんをあたしにくださいッ！」×２
09	無題（回文）	8 pt / 4 位 / 0 sp 回文単体はどこかで見たものたちだけれど、それを３つつなげてストーリーにしたところが、あっぱれな腕前でした。 なるほど、ちゃんとつじつま合ってますね。
10	予想外の告白	0 pt / 10 位 / 0 sp BL枠（言っとくけど今週限りだからねっっ！）、入ります。読みやすさでライバルを蹴落としました。 彼氏について、「しなやかで白い指先」みたいな伏線描写があるとより楽しい。
11	ショートコント～告白～	12 pt / 1 位 / 0 sp これは凄かった！ 言葉の連鎖でころがしていく「月」やら「杉」やらのひとつひとつが読み手のツボに入りまくりで、いっぱい笑わせていただきました。 こってりドラマを一票差で振り切っての首位、おめでとう!!!

		イチオシフレーズ：「突き合ってください」
12	届かない告白	5 pt　6 位　0 sp ラストは告白未満。 海に流す小瓶。さらりときれいにまとめた今週の読み納めでした。なんだか裏表紙専門店だそうで。 きれいな言葉は大歓迎です。今後ともよろしく。 特別賞：二人目に頼みま賞 from E班（5 7 12同時受賞）